

大学教育学会 第44回大会  
(岡山理科大学岡山キャンパス)

ラウンドテーブル3

**コロナ禍が  
学生の学びと成長に与えた影響**  
—大規模調査から大学教育の今とこれからのを考える—

2022年6月4日(土)

- 川嶋 太津夫(大阪大学)
- 山田 剛史(関西大学)
- 木村 治生(ベネッセ教育総合研究所)
- 吉本 真代(大阪大学)

- 杉谷 祐美子(青山学院大学)
- 谷田川 ルミ(芝浦工業大学)
- 樋口 健(新潟大学)

# 1

## 企画趣旨

山田 剛史 (関西大学)

木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所)

## ●本ラウンドテーブルの目的

本ラウンドテーブルでは、2008年から定期的に実施している大学生を対象とした大規模調査の結果を用いて、大学生をとりまく環境変化が学びと成長にどのような影響を与えているのかを検討する。とくに、第4回調査（2021年12月実施）には、前回までの調査でも確認した大学教育改革の影響が表れている一方で、コロナ禍によって学びのあり方が大きく変わった様子も見られる。いまだコロナ禍の影響が残るなかで、大学は学生の主体性をどう育み、成長をうながせばよいか。大学教育の今と将来のあり方について、参加者ととともに考える。

## ●分析に使用するデータ

ベネッセ教育総合研究所は今回共同で発表を行う大学教育研究者とともに、大学生の学習・生活の実態をとらえることを目的にして、2008年、12年、16年、21年と継続して「大学生の学習・生活実態調査」を行ってきた。本調査は、毎回4,000～5,000名の大学生（1～4年生）を対象とし、高校時代の学習の実態、大学選択や入学者選抜の状況、大学での生活と学習の意識・行動、友だちや教職員との関係、就職活動や将来観、大学生活で身についた資質・能力、満足度や成長実感など多岐にわたる内容をたずねている。

▶ 調査概要はp. 4、第4回調査の対象者の属性はp.5を参照

## ●調査対象

- 全国の大学1～4年生

## ●調査方法

- インターネット調査

## ●各回の調査時期・サンプル数

- 第1回 2008年10月 4,070名(男子2,439名、女子1,631名)
- 第2回 2012年11月 4,911名(男子2,791名、女子2,120名)
- 第3回 2016年11～12月 4,948名(男子2,680名、女子2,268名)
- 第4回 2021年12月 4,124名(男子2,228名、女子1,896名)

※インターネット調査会社の約420万人のモニター母集団のうち、「大学生」として登録されている約15万人に対して予備調査を実施。このうち、大学1～4年生(18～24歳、日本在住)にアンケートの協力を依頼。

※各回、文部科学省の『学校基本調査』の男女比率に近いサンプル構成になるように回収している

## ●調査内容

- 高校での学習状況／大学選択理由／大学の志望度／入学時の期待／大学生活で力を入れたこと／大学生生活の過ごし方／教職員との交流／保護者との関係／友だち関係／大学教育観／学びの機会／授業方法(対面授業・オンライン授業)に対する評価／学びに対する姿勢・態度／大学生活で身につけたこと／海外留学の意向／進路意識／建学の精神やポリシーの認知／大学生生活の満足度／学びの充実／成長実感／社会観・就労観／就職活動・インターンシップ など

※調査内容は、経年比較が可能になるように毎回ほぼ同一の内容にしているが、各回ごとの問題関心により異なる内容を含めている

## ●調査メンバー

- 川嶋太津夫先生(大阪大学)、杉谷祐美子先生(青山学院大学)、山田剛史先生(関西大学)、谷田川ルミ先生(芝浦工業大学)、樋口健先生(新潟大学)、吉本真代先生(大阪大学)、小林一木・木村治生・朝永昌孝(ベネッセ教育総合研究所)

# ◆第4回調査の対象者の属性

【5】

## ●調査対象は全国の大学1～4年生、4,124名回答

性別	男子	女子
	54.0	46.0

※以下の数値は、構成比率（%）を示している

学年	1年生	2年生	3年生	4年生
	25.0	25.0	25.0	25.0

所属大学	4年制	6年制	通信制	昼夜開講制	専門職大学	海外の大学
	93.5	4.6	1.3	0.4	0.9	0.1

※複数回答のため合計は100%にならない

学部系統	人文系	社会学系	外国語学系	法学系	経済系	国際学系	教育学系	生活科学系	芸術学系
	13.0	6.5	3.6	7.6	16.5	2.4	5.5	2.6	2.7
	総合科学系	保健衛生系	医学系	歯学系	薬学系	理学系	工学系	農水産学系	その他
	1.2	6.8	2.3	0.5	2.6	5.4	14.7	3.4	2.5

設置主体	国立	公立	私立
	23.2	8.2	68.6

大学所在地	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
	8.0	42.0	15.1	20.3	7.5	7.2

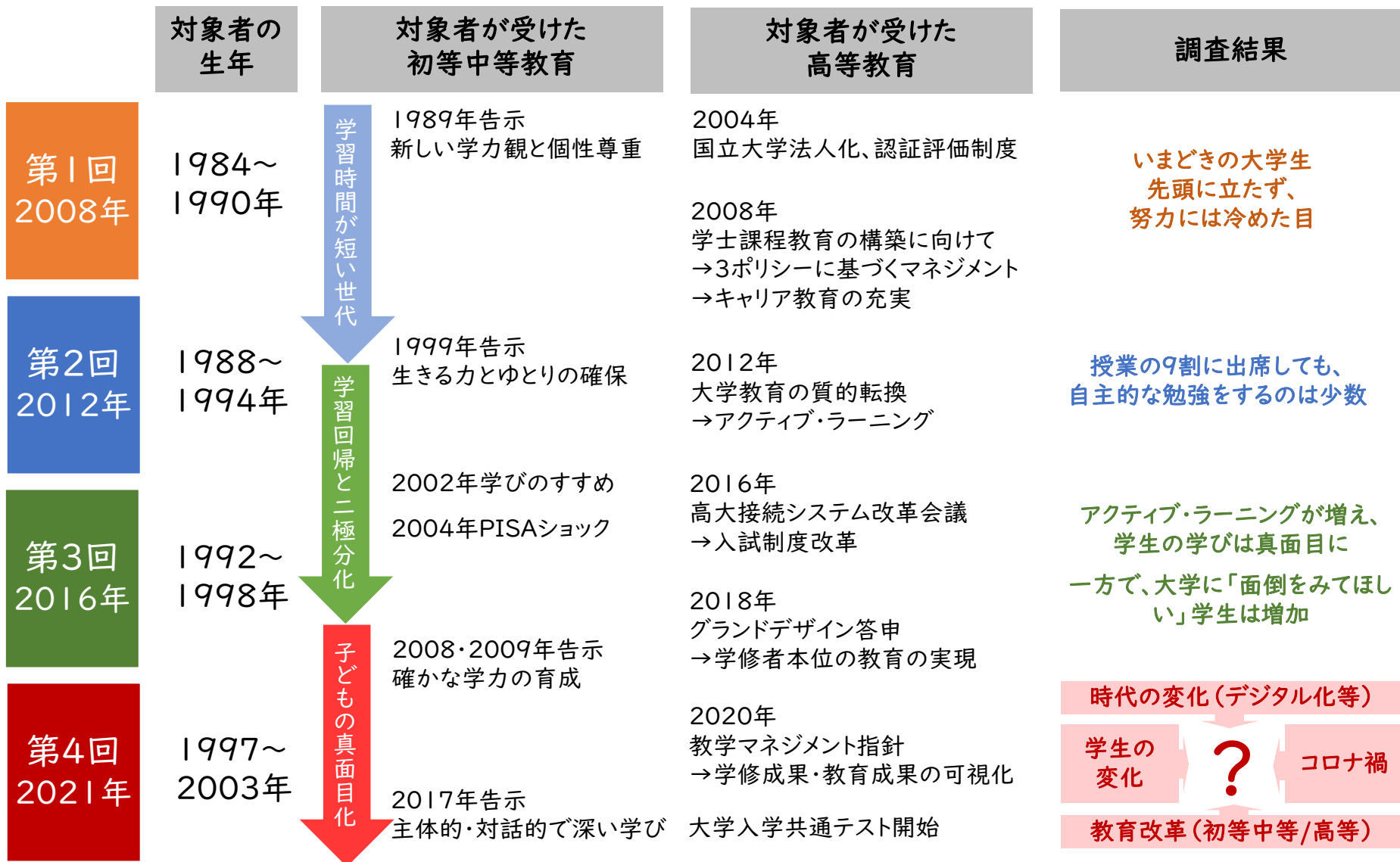
住まい	自宅	一人暮らし	大学寮	大学以外の寮	その他
	63.4	31.7	2.9	0.5	1.5

## ◆第1回調査から第4回調査までの対象者の属性に大きな偏りはない

# ◆時代的な背景

【6】

## ●時代や学生の変化、教育改革、コロナ禍の影響が複層的に反映



## 1. 前回までの目的は踏襲

大学生の学習・生活全般にわたる意識や行動を多様な観点からとらえ、大学生の実態を明らかにし、大学教育を中心としたこれからの大学生を取り巻く環境を考えていくための基礎データとして活用する。

## 2. 本調査の強みを最大限に生かす

2008年からの調査の継続が本調査の強み。既存の項目をできるだけ生かして、数値の動きから環境変化のインパクトを読み取る。

## 3. 前回までの問題意識を継続

①アクティブ・ラーニングの増加と授業の多様化、②学生の真面目化、③主体性の逡減（楽単志向の増加、学生の生徒化、保護者に頼る学生の増加）はどう変化したか。

## 4. 環境変化を踏まえた課題設定を行う

### ①コロナ禍の影響

正課/正課外における学修活動の制限、生活や経済状況の変化…など

### ②高等教育改革の流れ

アクティブ・ラーニングの増加（前回まで）、WEBを活用した学修活動の増加…など

### ③高校教育改革や高大接続改革の流れ

学校推薦型選抜・総合型選抜の増加、高校までの探究学習の拡大（影響は?）…など

# ◆本日の内容

【8】

1. 企画趣旨（5分）……………山田、木村
2. 報告1（15分）  
「学生と大学教育の13年間の変化」……………木村
3. 報告2（15分）  
「学生像のとらえ直し—生徒化は進行しているのか？」……………杉谷
4. 報告3（15分）  
「コロナ禍における大学生の人間関係」……………谷田川
5. 報告4（15分）  
「学生の学びと成長を促す対面・遠隔のベストミックスを探る」……………山田
6. 総括コメント（15分）……………川嶋
7. 質疑・議論（40分）……………山田



# 2

## 学生と大学教育の 13年間の変化

木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所)

# ◆報告の目的と流れ

【10】

## ●本報告の目的

最初のパートでは、調査内容のなかから経年比較できる項目を中心に、大学生の学習に対する意識や行動の変化をとらえる。そして、その変化から、大学教育が変わってきた様子やコロナ禍が与えた影響について検討を行う。

## ●報告の流れ

### ①高校時代の学びについて

高校時代の学びの様子、学習時間

### ②高大接続について

高校時代の学習と入試形態

### ③大学での学びについて

大学の授業の形態、授業に対する取り組み、大学教育観、生活時間（学習時間を含む）

### ④学びの充実度・成長実感について

学びの充実度、成長実感、学びの充実や成長実感に関連する要因

### ⑤まとめ

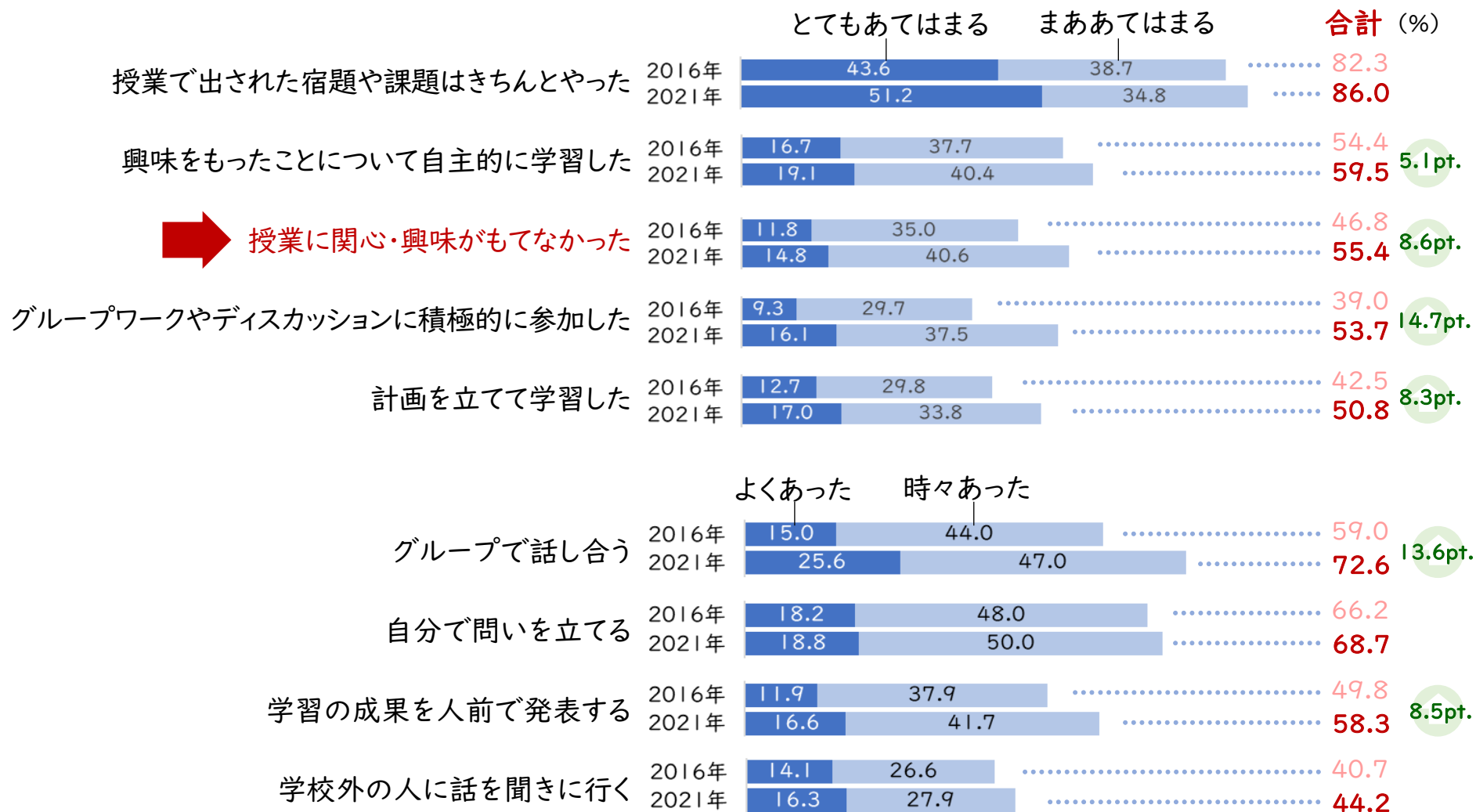
学生と大学教育の13年の変化、実践上の課題・研究上の課題

※調査項目によって、13年間の経年比較ではなく、9年、5年の経年比較しかできないものがある

# ◆高校時代の学びの様子

【11】

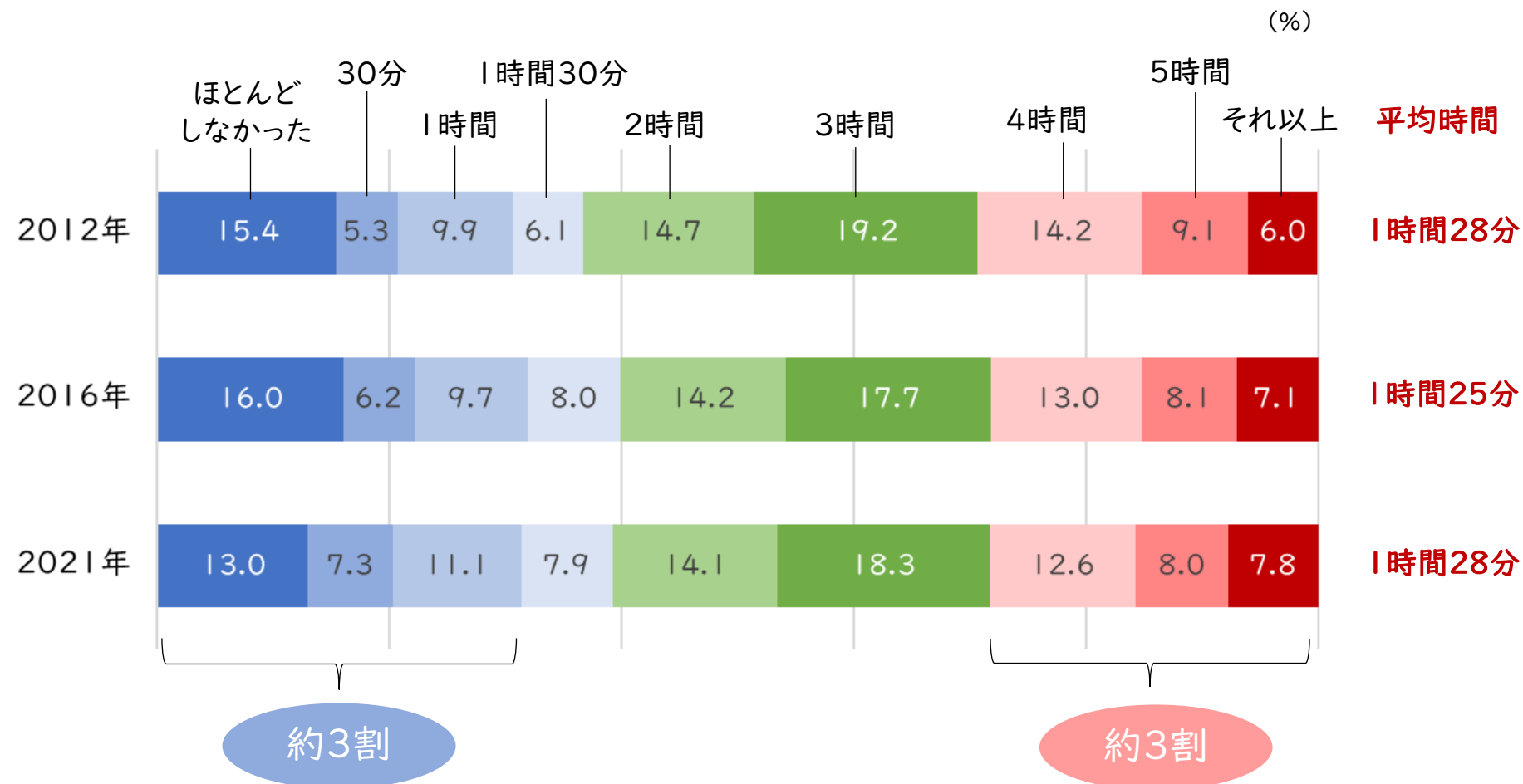
## ●対話的な学び、探究的な学びが増加の一方で、関心・興味が低下



※2016年→21年にかけて変化があったものを中心に抜粋して示した

## ◆高校時代の学習時間

【12】

●高3（9月時点）の**学習時間**はほとんど**変化していない**

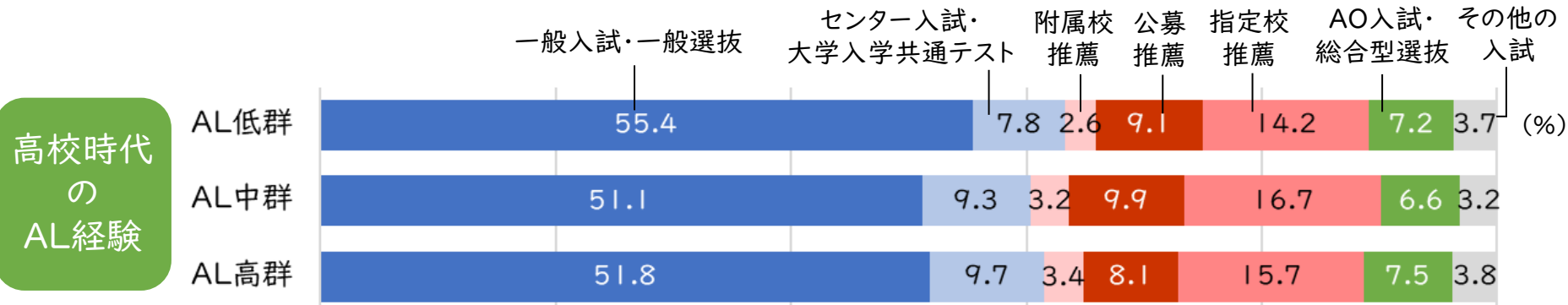
◆一貫して「1時間以内」が3割、「4時間以上」が3割と分散する

# ◆高校時代の学習と入試形態

【13】

アクティブ・ラーニング

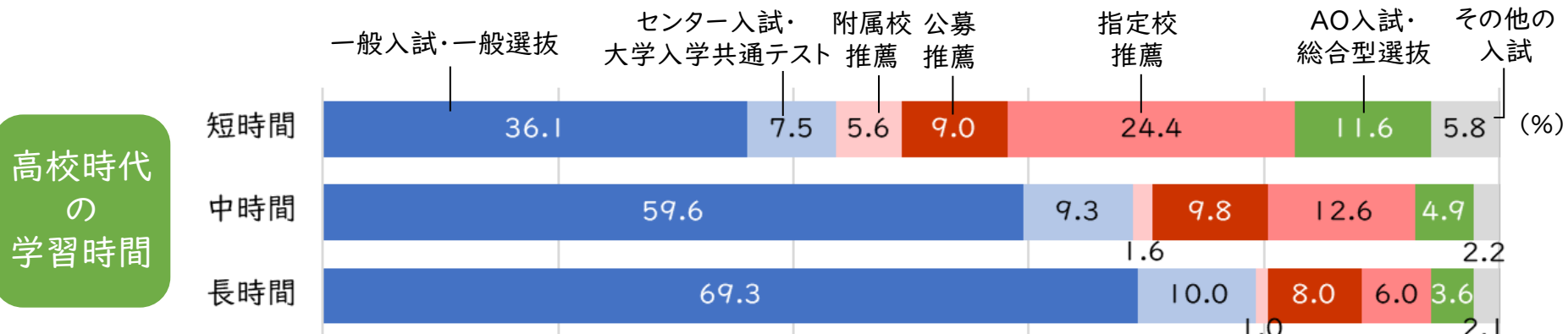
## ●高校のAL経験と入試形態は関連なし。入学難易度を統制しても同様



※高校時代のアクティブ・ラーニングにかかわる学習経験についての設問10項目（各3段階）の数値を合算し、AL低群、中群、高群ができるだけ均等になるように分割した。低群1,712名、中群1,070名、高群1,342名。

※10項目は以下の通り…自分で問いを立てる、課題を解決するための情報を集める、課題を解決するための方法を考える、学校外の人に話を聞きに行く、グループで話し合う、統計の知識を用いてデータを分析する、進路について調べたり考えたりする、学習の成果を人前で発表する、学習の成果をレポートや論文にまとめる、授業でデジタル端末を使う

## ●学習時間が長いほど一般入試を選択。入学難易度を統制しても同様



※高3（9月段階）の学習時間について、各群ができるだけ均等になるように、短時間の群、中時間の群、長時間の群を分割した。短時間群は1日1時間半以下で1,617名、中時間群は1日1時間半よりも長く3時間以下で1,338名、長時間群は1日3時間より長く1,169名。

【参考】木村治生(2020)「入学者選抜と大学入学前後の学びの関連の検討」『大学教育学会誌』42(2)、29-38.

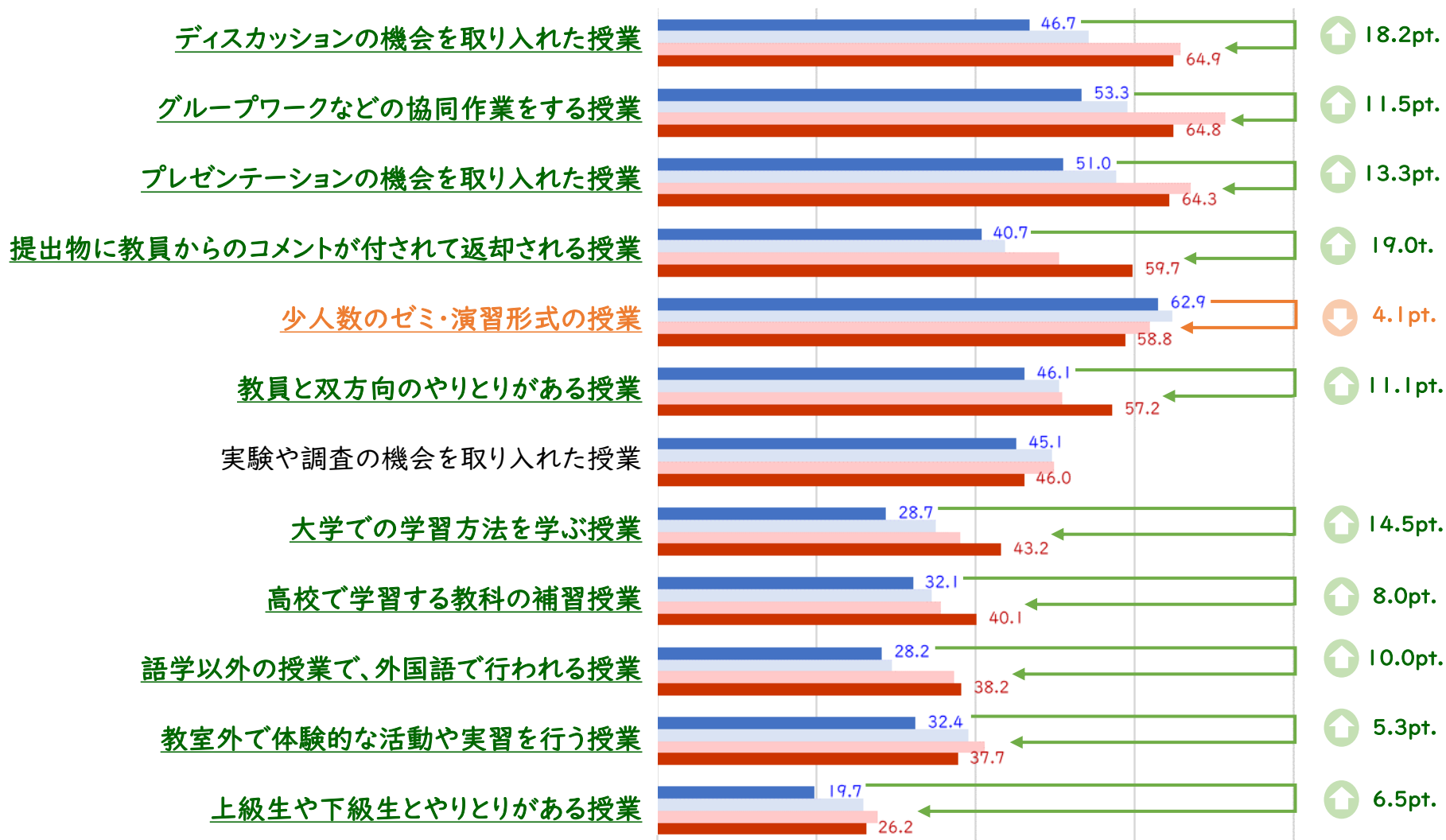
## ◆大学の授業の形態

アクティブ・ラーニング

## ●AL型の授業は広がっているが、コロナ禍により停滞も見られる

※「よくあった」+「時々あった」(%)

■ 2008年 ■ 2012年 ■ 2016年 ■ 2021年

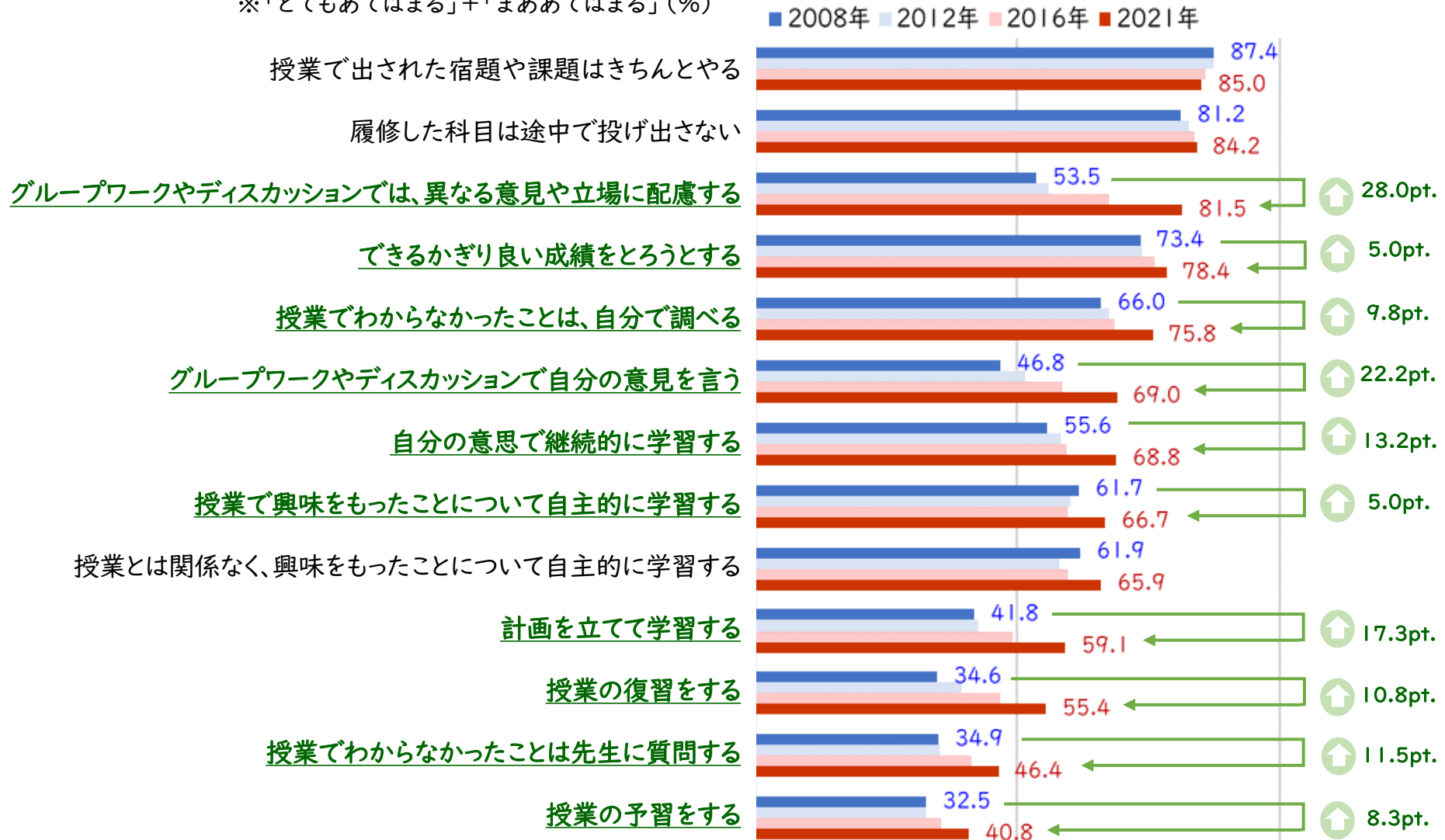


# ◆授業に対する取り組み

【15】

## ●全体に授業への積極性は高まり、**主体的・能動的な傾向**を強めている

※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」(%)



# ◆大学教育観

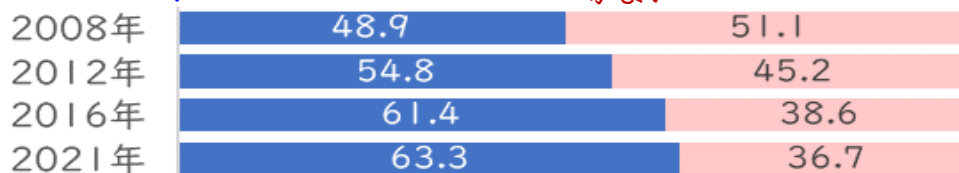
【16】

## ●「単位を楽に」という意見が増加、大学に指導を求める傾向も強まる

### ●単位取得

【A】あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい

【B】単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい

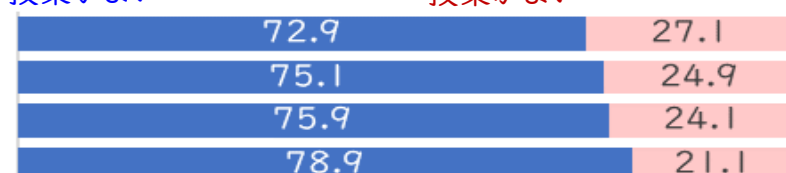


### ●授業難度

(%)

【A】応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい

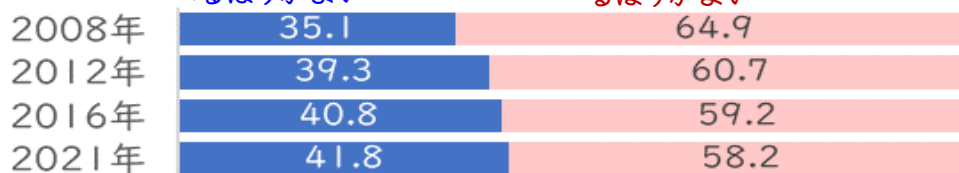
【B】基礎・基本は少ないが、応用・発展的内容が中心の授業がよい



### ●単位の系統

【A】あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい

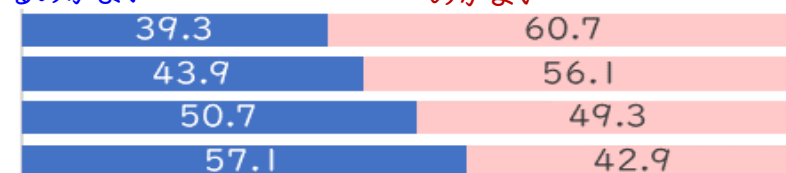
【B】あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい



### ●学習方法

【A】大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい

【B】大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい



### ●責任

【A】学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、大学の教育の責任だ

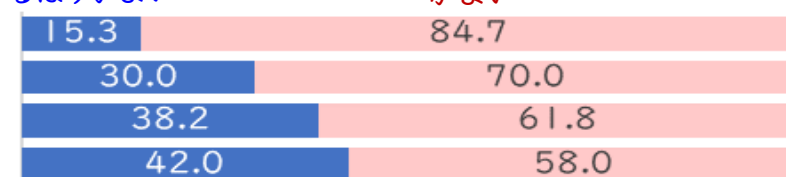
【B】学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、学生自身の責任だ



### ●学生生活

【A】学生生活については、大学の教員が指導・支援するほうがよい

【B】学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい



※2008年→21年にかけて変化があったものを中心に抜粋して示した



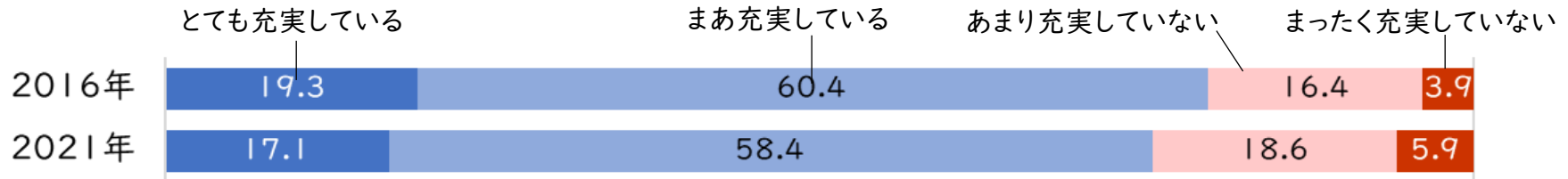
# ◆ 学びの充実度

【17】

● 「充実している」は微減。2020年のときの充実度が低い

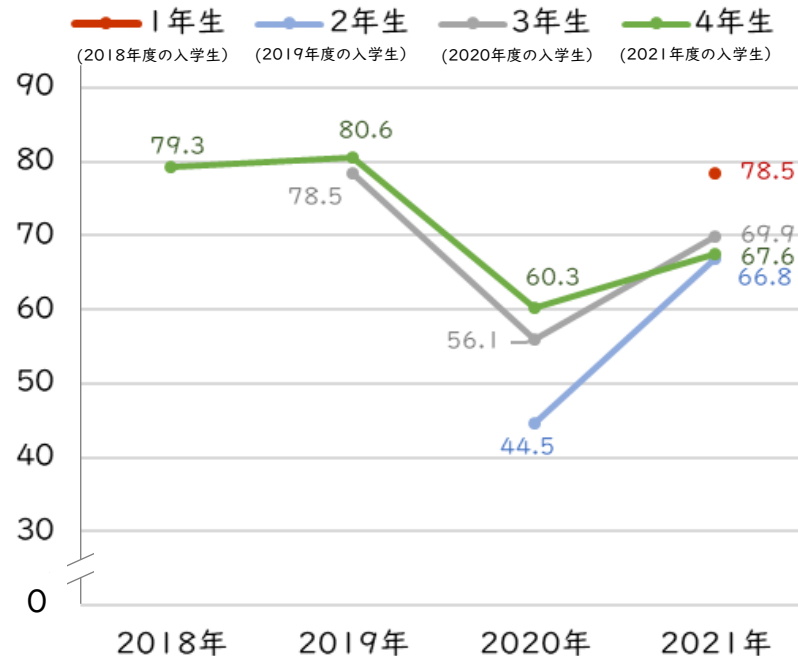
● 総合的な学びの充実度「大学全体」

(%)



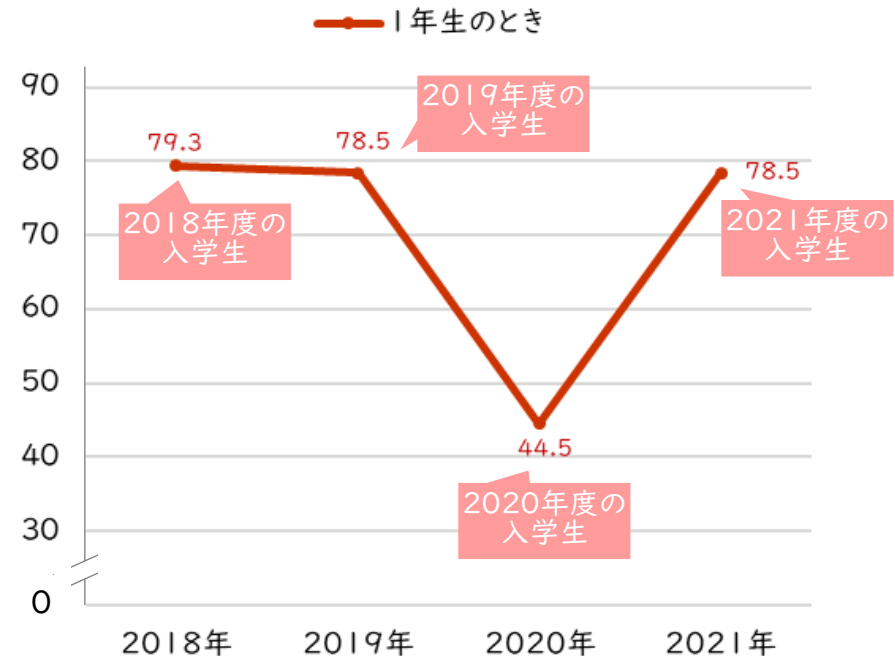
● 学びの充実度（学年別）

※「とても充実している」+「まあ充実している」の合計(%)



● 1年生のときの「学びの充実度」

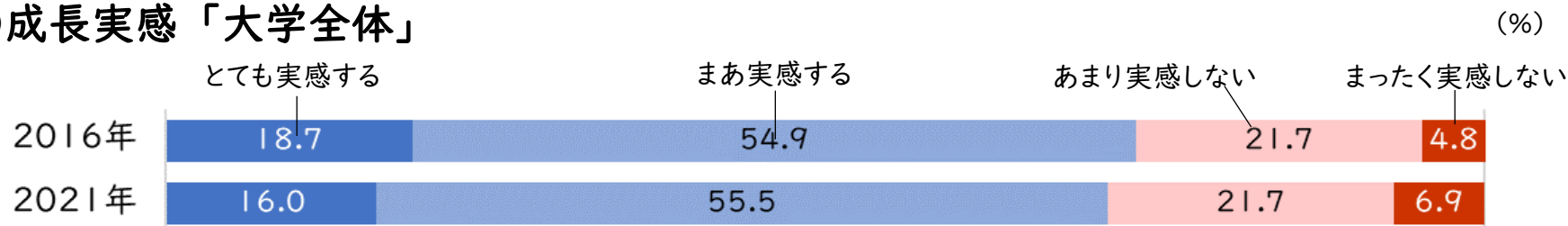
※「とても充実している」+「まあ充実している」の合計(%)



# ◆成長実感

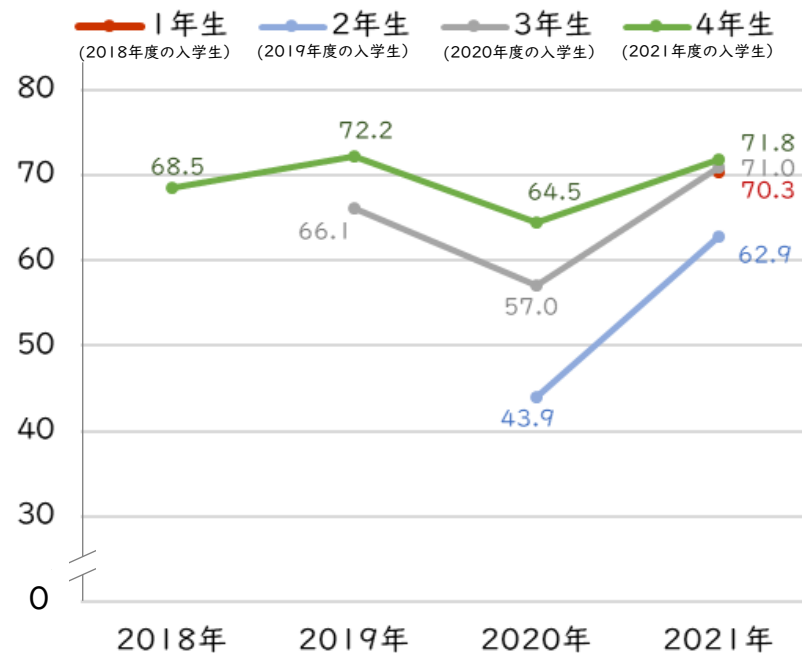
●他の学年と比べて**2020年度入学生の成長実感が低い**

●成長実感「大学全体」



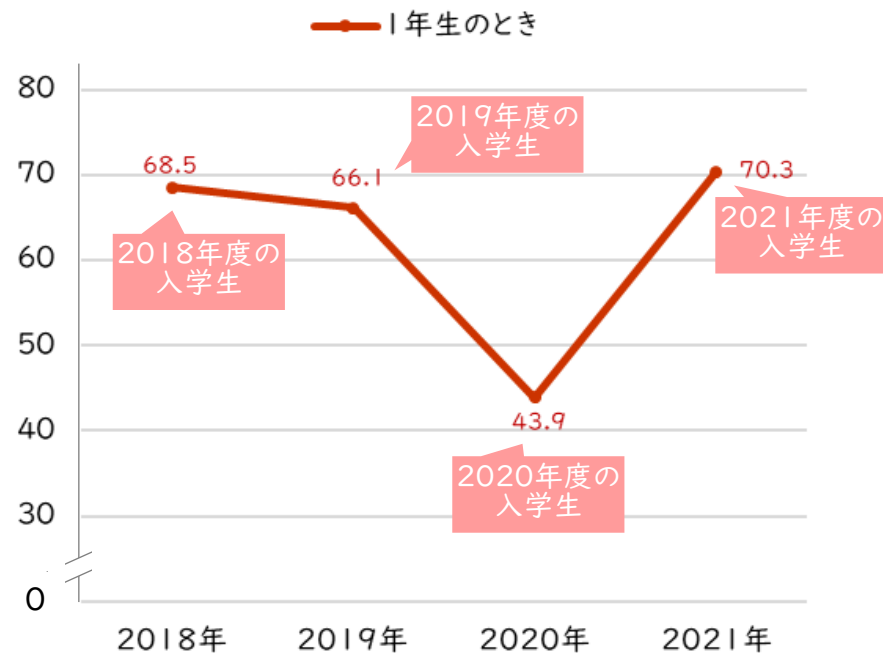
●成長実感（学年別）

※「とても実感する」+「まあ実感する」の合計(%)



●1年生のときの「成長実感」

※「とても実感する」+「まあ実感する」の合計(%)



## ◆学びと成長の関係（パス解析）

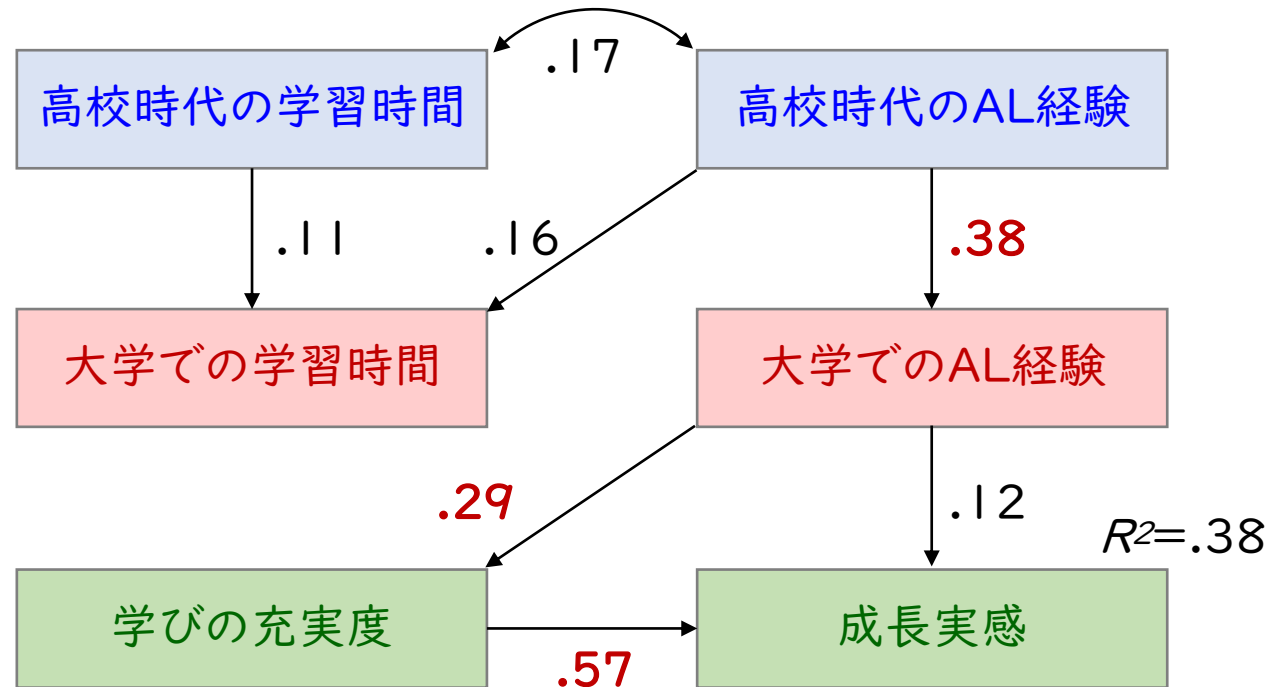
【19】

アクティブ・ラーニング

●AL経験が学びの充実を経由して、成長実感につながっている

高校時代の学び

大学での学び

学びの充実度/  
成長実感

※カイ二乗値：59.490 (df=8, p=.000) GFI=.995, CFI=.985, RMSEA=.040 ※誤差変数は図から省略した

★各変数の記述統計は次ページに掲載している

- ①高校時代の学びと大学での学びは連続性がある
- ②学びの充実や成長実感に効果が大いなのは、学習時間<AL経験
- ③AL経験は学びの充実を経由して成長実感につながっている

## ◆【参考】記述統計

【20】

変数名	変数の説明	最小値	最大値	平均値	標準偏差
高校時代の学習時間	高3(9月時点)の学習時間(1日当たり)について、「ほとんどなかった」を0、「およそ30分」を0.5、「1時間」を1…「5時間」を5、「それ以上」を6のように時間に換算した。	0.0	6.0	2.466	1.801
高校時代のAL経験	高校時代のアクティブ・ラーニングにかかわる学習経験についての設問10項目(各3段階)の数値を合算。10項目は以下の通り…自分で問いを立てる、課題を解決するための情報を集める、課題を解決するための方法を考える、学校外の人に話を聞きに行く、グループで話し合う、統計の知識を用いてデータを分析する、進路について調べたり考えたりする、学習の成果を人前で発表する、学習の成果をレポートや論文にまとめる、授業でデジタル端末を使う。	10.0	30.0	18.635	4.409
大学での学習時間	ふだんの生活時間(週当たり)のうち、「授業の予復習や課題をやる時間」「大学の授業以外の自主的な学習」「学習や教養のための読書」の3項目について、「0時間」を0、「1時間未満」を0.5、「1～2時間」を1.5…「16～20時間」を18、「21時間以上」を23のように時間に換算して合算した。	0.0	69.0	6.827	7.981
大学でのAL経験	大学でのアクティブ・ラーニングにかかわる学習経験についての設問10項目(各4段階)の数値を合算。10項目は以下の通り…ディスカッションの機会を取り入れた授業、グループワークなどの協同作業をする授業、プレゼンテーションの機会を取り入れた授業、少人数のゼミ・演習形式の授業、上級生や下級生とやりとりがある授業、教員と双方向のやりとりがある授業、学んだ内容を文章や口頭でふりかえる授業、学期末以外にもレポート・テストが課される授業、実験や調査の機会を取り入れた授業、教室外で体験的な活動や実習を行う授業。	10.0	40.0	24.604	5.319
学びの充実度	大学全体での学びの充実度について、「とても充実している」を4、「まあ充実している」を3、「あまり充実していない」を2、「まったく充実していない」を1とした。	1.0	4.0	2.867	0.758
成長実感	大学全体での成長実感について、「とても実感する」を4、「まあ実感する」を3、「あまり実感しない」を2、「まったく実感しない」を1とした。	1.0	4.0	2.805	0.784

※サンプルはいずれの変数も4,124名。

# ◆学生と大学教育の13年の変化

【21】

## ●結果のまとめ

### ①高校時代の学びについて

- 高校においても「対話的な学び」「探究的な学び」は増加する傾向
- ただし、学習時間にはほとんど変化がなく、二極化する傾向が続く

### ②高大接続について

- 推薦・AO入試は段階的に増加(図表略)
- 高校時代のAL経験と入試形態の関連は見られない
- 高校時代の学習時間と入試形態には関連があり、長い群は一般入試が多い

### ③大学での学びについて

- AL型の授業は広がっているが、コロナ禍により停滞も見られる
- 全体に授業への積極性は高まり、主体的・能動的な傾向を強めている

### ④学びの充実度・成長実感について

- 学びの充実度、成長実感ともにわずかに下がる傾向
- 2020年度入学生の数値が低く、コロナ禍の影響をもっとも強く受けていると推察
- AL経験が学びの充実を經由して、成長実感を高めることに効果を持つ

# ◆実践上の課題・研究上の課題

【22】

## ●実践における課題

### ①AL経験と学習時間の関係

対話的な学びや探究的な学びは高校から大学まで広がり、学生の成長実感にもつながっている。その一方で学習時間が増えているわけではない。日本の学生の課題として、学習時間の短さが指摘されるが、AL経験は学習量の増加には直結しないのか。

### ②AL経験と主体性の関係

AL経験は増えているが、心理的には大学に頼る傾向が強まっている。さまざまな学習経験は、学生自身が自分の学びをコントロールする主体性を育てていないのか。

### ③学びと入学者選抜の関係

選抜の多様化は進むが、その形態と高校までの学び（とくにAL経験）との関連が薄く、高校時代の経験が反映されていない可能性がある。選抜をどのように機能させるか。

## ●研究上の課題

### ①学びや成長の構造の細分化

- 学生の学びや成長が、どのような構造で成り立っているのか

### ②学びと成長の關係に影響する要因(施策)の検討

- 大学や教員のどのような働きかけが学生の学びを活性化させ、成長をうながすのか